

展示解説

付・収蔵資料



長岡市立科学博物館

Nagaoka Municipal Science Museum

博物館のおいたち

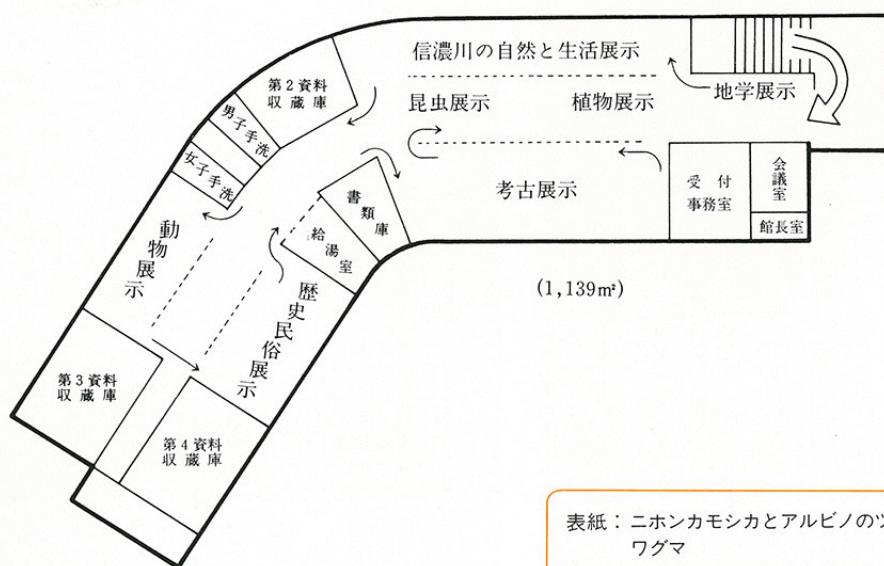
当館は、長岡が戦災復興の途上にあった昭和25年に、新潟県野鳥愛護会の提唱により長岡市立の博物館として悠久山公園の一郭に建設され、翌26年8月1日に開館しました。建設費、および展示ケースなどの多額の費用は北越製紙の寄附をうけています。

展示・収蔵する資料は、鳥類学者中西悟堂氏の指導により、国立科学博物館や林野庁（現農林水産省）、財団法人山階鳥類研究所などの全面的援助と資料の割愛をうけ、更に昆虫学の権威野平安芸雄博士の尽力、市内関原町の考古学者近藤勘治郎氏のご遺族の篤志、更に県内在住の生物研究者の協力をえています。昭和27年4月には新しい博物館法にもとづく登録を完了しました。

当初、自然科学部門として植物・昆虫・動物の3部門、人文科学部門に考古部門がありましたが、昭和44年に歴史民族部門、昭和58年に地学部門を新設、平成3年度には歴史部門を独立し、県内では数少ない総合博物館としての機構をととのえ、各部門には研究室を置き、学芸員を配しての資料の収集・発掘・保管・調査研究・展示・普及活動を実施しています。

悠久山の博物館施設は四半紀経過して老朽化がめだち、また冬期の入館者がほとんどないことから、新市庁舎の建設を機会に、旧庁舎を改装して、昭和53年4月1日に移転しました。悠久山施設にはなかった民俗部門の展示室を新たに設け、地学の展示コーナーや常設総合展示「信濃川の自然と生活展」を増設するなど、展示内容の充実をはかっています。

館内案内図



表紙：ニホンカモシカとアルビノのツキノワグマ

裏表紙：火焰型土器群（馬高・山下・千石原・岩野原から出土）

地学の部



ムカシマンモスゾウの臼歯化石



地質の展示

展示

新潟県産の代表的な岩石を展示し、背後に掲げた新潟県の地質図中にそれらの産地が示されています。

新潟県内には、いろいろな時代につくられたさまざまな岩石が分布しており、間瀬産の凝灰角礫岩や玄武岩の中にみられる沸石（白っぽい鉱物）は全国的に有名なものです。

小型の展示ケースには、南極地域観測越冬隊に参加された佐藤和秀長岡高専助教授から寄贈をうけた南極大陸の岩石や、日本専売公社新潟支局（現日本たばこ産業株式会社新潟営業所）より寄贈されたアメリカ合衆国産の岩塩、長岡市滝谷産のホホジロザメの歯やクジラの肋骨化石、三宅島1983年噴火の際に噴出した火山弾などを定期的に入れ替えて展示しています。

雪の問題を解説したコーナーには、長岡市の積雪量、積雪の分け方と重さ、雪が降るまでの仕組みの図表、積雪の沈降力を示す鉄パイプなどを展示しています。

資料

県内の代表的な地層・鉱山を中心に約50か所を調査し、1500点余の岩石・鉱物・化石・火山灰などの資料を収蔵しています。

雪の関係では、昭和43年に閉館した積雪科学館の資料を譲り受けており、出版物では「積雪研究」・「積雪シリーズ」・「まどのゆき」などのバックナンバーを保存しています。

地質年代尺度表

新 生 代	第四紀	完新世	沖積世	0	
		更新世	洪積世	0.018 0.010	
新 生 代	新第三紀	鮮新世		1.8	
		中新世		5.0	
古 第 三 紀	古第三紀	漸新世		24	
		始新世		37	
中 生 代	古 第 二 紀	暁新世		53.5	
		白亜紀		65	
中 生 代	古 第 一 紀	ジュラ紀		143	
		三疊紀		212	
古 生 代	古 第 一 紀	二疊紀		247	
		石炭紀		289	
古 生 代	古 第 二 紀	デボン紀		367	
		シルル紀		416	
古 生 代	古 第 三 紀	オルドビス紀		446	
		カンブリア紀		509	
先カンブリア代				575	
				(単位 100万年)	

植物の部



県の木ユキツバキの展示

展示

新潟県の植物を基本にして、学問的に興味のある植物と、身近な植物の展示に大別し、腊葉標本を主に乾燥標本、液浸標本、写真、解説ラベル、パネルなどを使用し知的好奇心、自然保護思想のかん養に役立つよう配慮しています。

飯豊山の植物は、主に高山性の植物を展示しています。飯豊は、高山植物の分布とすぐれた自然景観のある盤梯朝日国立公園として有名で、新潟県の北東部、福島県、山形県との県境に位置する大きな山岳です。最高峰は新潟県の大日岳(2,128m)で、これより西方の飯豊山(2,105m)を主峰にして峰がほぼ西北から東南に約30kmも連らなっています。

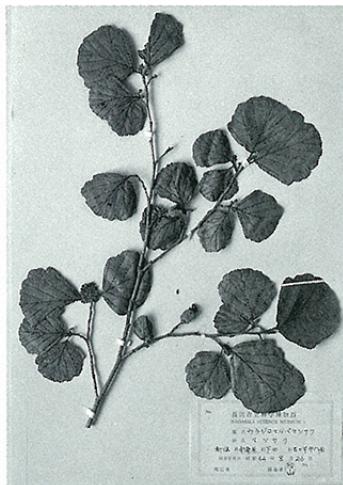
この地域の植生上重要な事柄は、①高山植物が多く生育している。②稀産種や南限・北限の種類が分布している。③ユキツバキを林床にもつブナ林が広範囲に発達している。④高木のオオシラビソやコメツガなどの針葉樹林帯がない。⑤主稜沿いに湿性のお花畑があるなどです。稀産種のハクセンナズナ、ミツデウラボシなど多数の腊葉標本を展示しています。

新潟の稀産(珍らしい)植物のコーナーは、分布上珍らしい植物を展示しています。県内にはシダ植物以上の高等植物は2,000種ほど分布しているといわれ、その中には、分布や生態の上で珍らしい植物があります。

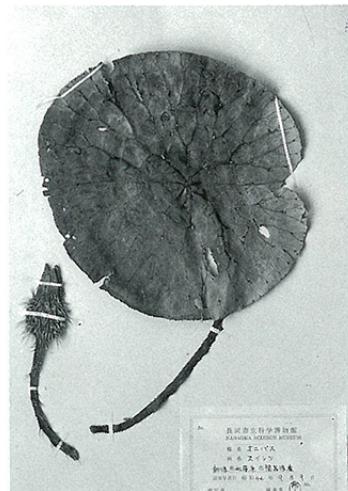
オニバスやツボクサは暖かい南の地域に分布の本拠をおき新潟県が分布の北限となっており、逆にシダ植物のリシリシノブは寒い北方に分布し、県が南限になっています。バシクルモンは本州では青森県の一部の海岸と角田海岸に、イソニガナは柏崎海岸にしか生育しない隔離分布する珍らしい植物です。また、名前をつける時新潟県の植物がタイプとなったものにヒメミヤマカラマツ、ウラジロマルバマンサクなどがあり、イワインチン、ミヤマノキシノブ、アズマガヤなどは生育地が少ない稀産種となっています。

身近かな毒植物は、毒は薬といわれるよう、有毒植物でも調整法、用法、用量を正しくあつかえば薬効を現わすものもあるが、ここでは誤用すると恐ろしい有毒植物になるという意味で展示してあります。トリカブト、ドクツツギ、アメリカヤマゴボウ、バイケイソウなど身近かな20数種類の腊葉標本を取り上げ、それぞれに植物の分布、有毒部分、間違って食べた場合の症状、利用などをラベルで、そのほかパネルでは、毒植物の主な有毒成分、毒植物の分類などを解説しました。

いろいろなキノコは、食用になるナラタケ、クリタケ、ニンギョウタケなど20数種類をスライド展示し、それぞれに和名、生える場所、方言などを解説し、毒



タイプ標本になった新潟県の
ウラジロマルバマンサク



新潟県が北限のオニバス

キノコとの区別ができるようにしてあります。毒キノコのドクササコは、食べて4~7日潜伏の後発病し、手足の指先に焼け火箸を刺したような激痛がおこる恐ろしいキノコです。クサウラベニタケは県内で一番中毒例の多い毒キノコで、一見食べそうな温和な形、色合いなので注意が必要です。昔から毒キノコの見分け方がいろいろ伝わっていますが、いずれも迷信でそんな重宝な区別のしかたはありません。

県の木ユキツバキは、1947年東京大学教授本田正次博士によって岩手県の山中で発見され世に出た植物です。新潟県を中心に北は秋田県から南は福井県までの日本海側に面した山地に分布し、さし木が簡単です。

尾瀬ヶ原の植物は、県北部の飯豊山の山岳植生とは対照的に山地湿原植生でおおわれ、ニッコウキスゲ、リュウキンカ、ホロムイスゲ、ツルコケモモなどが豊富に見られます。また我が国最大の高層湿原で、特別天然記念物に指定されています。

資料

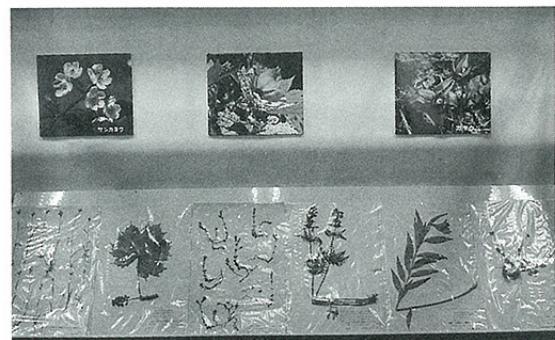
シダ植物以上の高等植物を中心に腊葉標本が26,000点、ほかに蘚苔標本が300点ほどあります。標本は新潟県内産のものが主で、研究テーマにそって地域のフラグ調査時に採集されたもの、または寄贈されたものです。中には、電源開発のため消えた奥只見銀山湖の湖

底に眠る奥只見の植物、新潟平野にあって干拓で消滅した鎧潟の植物、大半が干拓された福島潟の植物などの標本もあります。また、国から許可を得て採集した盤梯朝日国立公園飯豊連峰の植物、日光国立公園尾瀬ヶ原の植物、上信越高原国立公園苗場山の植物などの貴重な標本のほか、分布上珍らしいバシクルモン、ハマニガナなどの標本もあります。

県外では、北海道の大雪山、雌阿寒岳、羽後の鳥海山、岩代の雄国沼、越中の黒部峡谷、信濃の戸隠、駿河の富士山、伊豆の八丈島、遠く大隅の屋久島など、国外では南洋ボナペ諸島の標本も収蔵されています。

これらの標本は、ほぼイングラーの分類系に従って整理し、科の中での種の配列はアイウエオ順にしてすぐ引き出せるように収納しています。

飯豊山の植物展示



昆虫の部



種の分化を解説した展示

展示

人間生活にかかわりのある昆虫と昆虫界にあらわれたいろいろな現象について解説しています。

人体害虫には、虫の体液がつくと皮膚炎を起すカミキリモドキの仲間、針状の刺毛がつくと炎症を起すドクガなどがあります。また、ハチ類は蟻酸をもっていますが、血管内にこの毒液が流れこむと人命を奪うこともあります。これらの害虫のうち代表的な種を紹介しました。

森林・作物害虫としては、樹勢が弱まるとすぐ集ってきて枯らしてしまうキクイムシ類、ガの幼虫でサクラの葉を食べつくしてしまうモンクロシャチホコ、たいていの植物に被害を与えるアメリカシロヒトリの一生など、生態がわかるようにしてあります。

魚類の害虫のうち、錦鯉の稚魚にとびつき体液を吸収してしまうゲンゴロウの仲間やミズカマキリなどは大きな被害を与えていますが、これらの種は、平野部では少なくなりました。

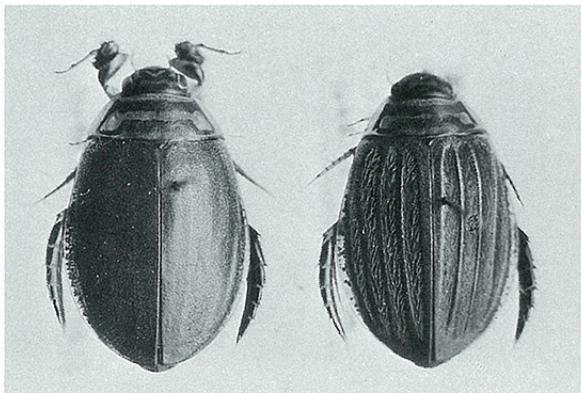
分類は基礎的な分野として重要です。県内に分布する大きな類(目)を普通種で分けたのが「昆虫の分類」です。昆虫の種類数は地球上に生活する動物の80%以上を占めていると言われていますが、進化の系統をたどっていくと5億年も前にさかのほることができます。

種の成立は、地理的・生態的隔離→分化→新しい種

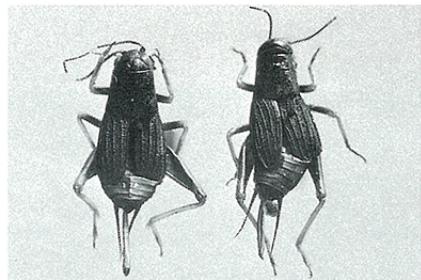
の流れの中で、亡びたり栄えたりしているわけです。たとえば、高山蝶のベニヒカゲは、北方系の種ですが、元は一つの大きな集団であったわけです。それが気候的な影響を受けて山岳地に追い上げられ、山ごとの小さな集団に分れると、形質がそれぞれ別の方向に向い、やがて新しい種になってしまいます。このような理論は、ベニヒカゲやウスバシロチョウの地方差を見るとよく理解できます。ベニヒカゲは、谷川連峰産と妙高山群のものとは円紋の形や体の大きさにはっきりした違いが見られます。また、本県のウスバシロチョウは、太平洋岸のものに比べるとかなり黒ずんでいることがわかります。

種の分布は絶えず動いています。特に、人間社会に影響された変化は、分布図を大きく変えてしまいました。湖沼の干拓によって絶滅したベッコウトンボやオオキトンボ、川が汚れたために住めなくなったアオハダトンボなどたくさんあります。反対に増えた種もあります。たとえば、アメリカシロヒトリやクロゴキブリなどはよい例です。

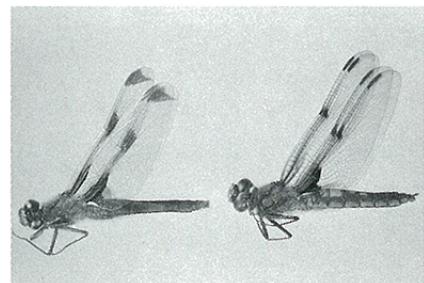
セミは本県に12種います。能生町白山神社の社そうに多いヒメハルセミは、日本海岸では最北端に位置し、文化財(天然記念物)として、国から指定されています。本県だけに現われる体色がみかん色のきれいなエ



氷河期の遺存種メスジゲンゴロウ(左おす 右めす)



新潟県が北限のクマズムシ



左 ベッコウトンボ(鎧潟産)右よく以た
ヨツボシトンボ

チゴエゾゼミ（エゾゼミの変種）は、たくさん出る年と少ない年があって注目されます。

西山丘陵は、ニュータウン工事が進められていますが、この地域は海岸に近く高い山がないので南方系の種が多いようです。特に、面白いのは、近畿地方以南に分布するミドリササキリモドキがクズの葉上に多いことです。また、この地域で環境と地表性昆虫の関係を調べてみました。結果は、人手が加えられたところほど種類組成に片よりがあり、雑木林のような植生の安定したところほど種類ごとの発生量が平均化していることがわかりました。

氷河期に侵入し栄えた北方種は意外に多いですが、これらの種は、環境が悪化するとすぐ亡びてしまいます。姫川流域に多産した高山蝶のクモマツマキチョウ（県指定天然記念物）は、国道の改修工事の後、見られなくなりました。南方種は、海岸線に沿って入ってくるのが多いです。モンキアゲハ、ウラギンシジミ、クマズムシなどは30年くらい前に、アオモンイトトンボ、ネキトンボ、マルタンヤンマなどは最近です。モンキアゲハなどは北進するようですがよくわかります。

トンボ類は99種記録されましたが、平ヶ岳(2,140m)から昭和54年に採集されたホソミモリトンボとエゾトンボの標本は、新潟県では最初のものです。

「昆虫標本の作り方」では、きれいな標本を作るにはこれくらい器具が必要だという見本です。

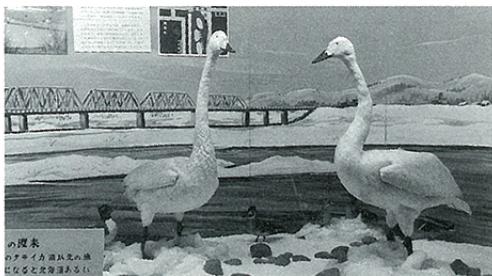
資料

在庫標本は、1,365箱に約15万点収蔵しています。分類区分ではチョウ類、ガ類、甲虫類、カメムシ類が多く、地方差を表わすベニヒカゲやウスバシロチョウの産地別標本は約千点に及んでいます。

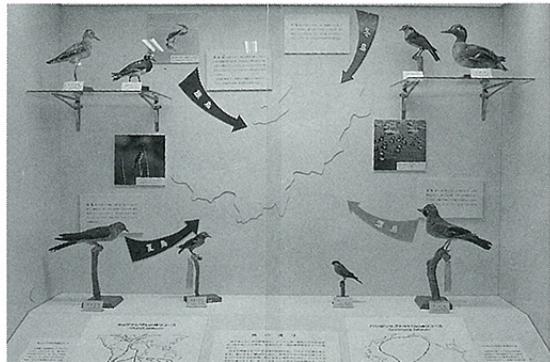
現在、展示準備中のものには、県内産のナナフシ類、古い止水域にすむ昆虫、雪虫、ハマベウスバカゲロウの生態標本などがあります。また、展示標本として収集に努力しているのは、県内外産のマイマイカブリです。この種には、国内に多くの亜種（地方種）が知られていますが、県内には四つの亜種がすみ佐渡固有のサドマイマイカブリ、粟島固有のアワシマアオマイマイカブリのほか、本土側にコアオマイマイカブリ、ヒメマイマイカブリの二つの亜種が分布しています。ところが、この二つの亜種の境が問題になっていて、多くの研究者によって調査が進められています。

当館の昆虫標本は、テーマをもって調査した場合はテーマごと、一定地域の調査では地域ごとに収蔵し、将来、地方ごとの特徴を解説する際の便を考えています。

動物の部



冬、信濃川に渡来するハクチョウ



渡り鳥の展示

展示

鳥類と哺乳類に関する展示をしています。鳥類の関係では、鳥の渡りやサギ類の繁殖生活などの生態的なものから、卵や巣の展示まで実物標本を基にして解説しています。

渡り鳥とは、繁殖地とそこから遠く離れた越冬地との間を年1回季節的に移動するような鳥をいい、日本の鳥類の約75パーセントはこのような渡り鳥だといわれています。夏鳥のツバメやカッコウ、冬鳥のツグミやガン、ハクチョウなどは良く知られた渡り鳥です。近年、これらの渡りの経路やその目的地が、標識調査によって明らかにされつつあります。展示ではこの標識調査の成果を基に日本で繁殖したツバメやアマサギが秋には南のフィリピン方面に渡り、日本で越冬したカモ類が春には北のサハリン、カムチャッカ方面に渡っている事実を、また、新潟県のスズメやモズが、関東や中国地方にまで移動している事実をそれぞれ示しています。

環境と鳥の種類では、鳥類がそれぞれ環境に適応して生活していることをみます。スズメやカラスは人間の生活圏内に、キビタキやオオルリなどは山地の森林にそれぞれ生活域を持っています。コヨシキリやホオアカ、ヒバリなどの草原性鳥類は、信濃川や阿賀野川の河川敷にある草原を繁殖地に利用しています。

悠久山には30年余を経過した、アオサギ、ゴイサギ、コサギの3種が混棲する集団繁殖地（コロニー）があります。特にアオサギのコロニーはここが県内最大の

ものです。ジオラマ展示と合わせて各種の営巣数の推移とコロニーでの生活を解説していますが、最近ゴイサギの営巣数が増加し、コロニー内の環境が悪くなってきたため、ゴイサギを信濃川へ移動させる方策がとられています。

鳥の巣の型は鳥の種類によって、茶わん型、皿型、コップ型など多様です。メジロは木の枝にクモの糸でつるしたハンモックのような茶わん型の巣をつくり、オオヨシキリは草の茎やヨシの葉を使ってコップ型の巣をつくります。ここでは、メジロ、エナガ、カワラヒワ、ホオジロ、オオヨシキリ、ヒヨドリの各巣を展示しています。

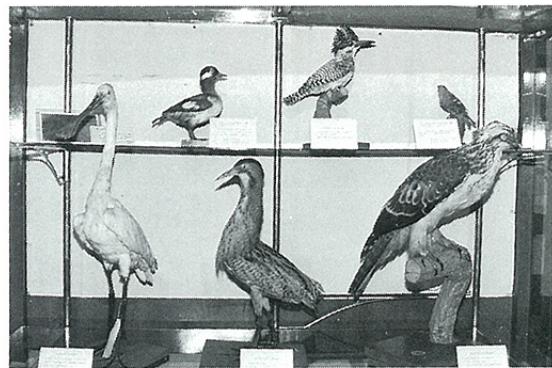
鳥の卵もまた種類によって様々です。卵の展示コーナーでは大は330～350gもあるオオハクチョウの卵から、小は1～2gのメジロの卵まで、全部で44種の鳥類の卵が比較できます。

鳥の体の特徴は、その鳥の生活型を反映しますが、それはくちばしと足に最も顕著に現われます。ワシタカ類の太い足とカギ形のくちばし、カモ類の水かきのある足と平たいヘラ状のくちばしなど、いずれもその鳥が採る餌の種類とその採り方、それに生活場所が強く関係していることがわかります。

珍らしい鳥のコーナーでは、ヘラサギ、ヒメハジロ、ヤマセミ、グマタカ、コバシギンザンマシコ、サンカノゴイの6種類を展示しています。コバシギンザンマシコは、北海道に生息するギンザンマシコに近い亜種



冬、信濃川に渡来する
オジロワシ



珍らしい鳥の展示

で、カムチャッカ、東北シベリアなどに生息し、日本での記録は昭和32年2月に本県の与板町で捕獲された当館のこの標本が一例あるだけです。

哺乳類の展示では、ツキノワグマの白化個体（アルビノ）や、夏毛のニホンカモシカ、それにキツネやタヌキなどの実物標本を展示しているほか、柏崎市の猩々洞のコウモリの生態、新潟県の食虫類と平野部におけるサドモグラとコモグラの分布、家ネズミと野ネズミの生活、オコジョとイイズナの季節による換毛などを、それぞれ実物標本を基に解説しています。

ツキノワグマの白化個体は、天保年間に八海山で記録されたものを含めて、新潟県に限ってこれまで5頭捕獲されており、そのうち4頭は村松町と下田村という山続きの2町村で捕獲されています。つまり、ツキノワグマのアルビノの出現頻度は、新潟県のこの2町村の山地に特に高いという学界でも注目すべき現象があります。

けだものの仲間のコーナーでは、タヌキやキツネなどの身近な動物を展示しています。これらの動物の中には名前がよく混同されているものがあります。例えば、タヌキとアナグマを混同してムジナと呼んだり、ムササビとモモンガが同一視されたりします。ここではそれらの違いを実物標本によって確かめてください。

資料

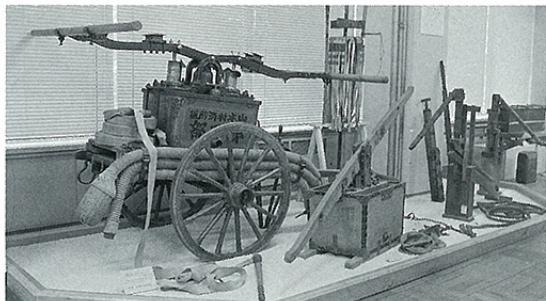
動物部門の資料は、鳥類、哺乳類の剥製標本と、鳥類の巣、並びに卵が主なものです。資料の収藏点数は鳥の本剥製標本が398点、仮剥製標本が1,409点の合計1,807点であり、それに鳥類の巣が120点、卵が293点という内容です。その外に、ほぼ全国から集めた貝類標本が514種 1,107点あります。

哺乳類では展示の項で説明したようなカモシカなどの本剥製標本が19点、ネズミ、モグラ類を中心とした仮剥製標本が49点の合計68点になります。収集された地域は全国に広がっており、鳥類の標本は一部国外で収集された資料も含んでいます。これらの資料の中には、現在では収集することが不可能と思われる珍しいクマゲラ（キツツキ科）やオオワシ・オジロワシ・シリハヤブサ・シベリアハヤブサ・オオタカなどのワシタカ類の標本が収集されています。



日本で1回記録されただけの
コバシギンザンマシコ

歴史民俗の部



消防器具の展示

展示

庶民生活のあとをしのぶ民俗展示を行っています。いまはほとんど姿を消した職人の道具類、米の脱穀調整機具・昔の消火器具・消防具、長岡瞽女、雪国の履物類などのコーナーを設けています。

職人の道具のコーナーは、当館が一職人のほぼ全体の道具を収蔵するものなかで、桶屋・農鍛冶の2職人のものを展示しています。一つの仕事に、その製作工程にしたがっていかに多くの道具が使われていたかが知られます。

昔の日常生活で、木製の桶や樽の使用は欠かせませんでした。戦前、長岡の桶屋組合に入っていた桶屋は40軒もあり、風呂桶や味噌桶・漬物桶・洗い桶・米研桶・手桶・醤油樽・酒樽・お櫃・鹽・お丸・肥桶など多様に作っていたが、その後アタン製やポリ製の容器におされ、桶作り職人はほとんど姿を消しました。桶作りは、板をはり合わせて水が漏らないようにするためかなりの技術を要し、製作用具にも外剪や内剪、外丸鉋や内丸鉋、底回し鉋、竿鉋など独特のものが使われました。

農鍛冶は、農具の刃物を打つ職人のことで、戦前には、町の周辺部にかなり多くの職人がいて、近在の農民の要望にこたえ、刃物を供給していました。本県の中越や上越地方には、この農鍛冶が鍬・鎌などたくさんの農具を所持し、毎年新しい刃をつけて農民に貸してやる“貸鍬”的制度が行きわたっていたもので、その使用料は取れ秋に米で支払われました。火を熾すフイゴや

鉄床・槌・ハンマー・箸・バスなどの道具があります。

米の脱穀調整は、今は機械化が進み、短時間のうちに大量に行なうことが可能になりましたが、昔は幾段階もの手をかけ大変な苦労をしました。その昔の様子を、工程に従って道具を展示し、解説しています。穂からもみ穂を取り離す千歯や足踏回転脱穀機、穂をすり割って玄米を取り出す木臼や土臼、穂穂と玄米を遅り分ける篭や唐篭、籠、万石、玄米を精白する米つき臼など。

消防・消防具は、江戸時代から戦前にかけて使用された各種の龍吐水や大型腕用ポンプ・鳶口・鉤繩・マトイ・布製バケツ・消防衣などを展示しています。龍吐水は、水鉄砲型・水揚式ポンプ型・シーソー式ポンプ型など、各種の形態があります。今日のエンジン付消防車からみると、規模・機動力とも随分と劣りますが、その時代に精一杯工夫したあとが見られます。小さいのは手に持ち、あるいは肩に担ぎ、大きいのは夏場は台車に載せ、積雪時はソリに載せて火事現場に急ぎました。長岡では、この種の消防器具の江戸時代からの製造元として、表町の横村屋が知られており、展示品の多くもこの横村屋製です。

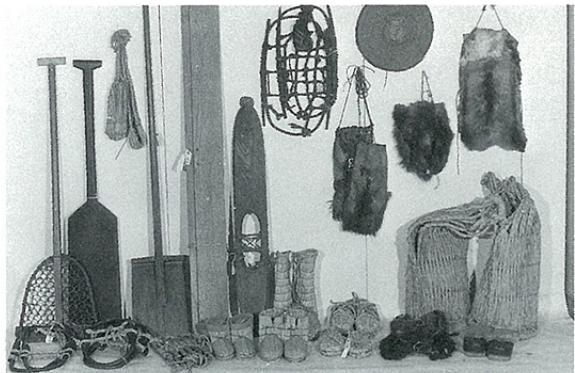
瞽女は盲目の女性放浪歌芸人です。かつて長岡に全国一の規模を誇った瞽女仲間の本部がありました。大工町に屋敷を構え、瞽女頭は代々山本ゴイを襲名し、中越地方に散在する輩下の瞽女を統率した。最盛期の明治中ごろは総勢400人に達したといわれます。瞽女の掟は厳しかったが、一応の芸を身につけると、親方や姉弟子に連れられ、手引きに引かれて旅稼業に出た。長岡瞽女は関東から甲信、東北地方一帯に巡業し、農山村民に大いなる娯楽を提供しました。そのレパートリーは広く、祭文松坂（段物）や口説・端唄・長唄・常磐津・清元・新内・義太夫のサワリ、雑歌のはやり節や民謡が含まれています。ここでは瞽女の三味線や笠、旅装束、規約や歌本などを展示しました。

積雪期の履物は、雪国の人たちがかって誰でもが使用した履物類—ワラグツ・スッペ・フカグツ・ハッパキ・甲掛け・カンジキなど—や、山民が狩猟に使った皮手袋や皮沓・鉄カンジキなどで、県内の山間部を中心収集した民具を展示しています。



ワラズリ（長岡市）

（国指定重要民俗文化財）
東北日本の積雪用具



資料

この部門では、積雪期の民具が豊富に収集されています。戦後間もなく長岡の新潟大学工学部内に開設された積雪科学館が長年にわたって収集した雪国の民具をそのまま受け入れています。これは、北はサハリンから南は岐阜県にいたる広い地域より収集したもので、その内容は服物・居住用具・生業用具・交通用具・運搬用具・信仰用具など多方面にわたっており、雪国の民具を比較研究するうえで貴重です。そのうちの243点が「東北日本の積雪期用具」として、国の重要民俗文化財の指定をうけていますが、更に、その後当館が本県を中心に収集した積雪期の民具は400点に及んでおり、この種の収蔵資料はますます価値の高いものとなっています。

民俗資料としては、この積雪期の生活用具のほかに、郷土長岡を中心とする農機具（農耕・脱穀調整具）、養蚕・製糸・機織具、河川の漁具・砂利取道具、陸送運搬具、住居用具（食器・化粧具・灯火具）、職人所用具（塗師屋・木挽・農鍛冶・桶屋道具）、紙すき道具、盲人歌芸人瞽女^{こぜ}の資料などがまとまったものとして注目されます。

歴史資料としては、長岡藩主の書や絵、江戸時代の武器武具、旅道中の所用具、戊辰戦争資料、「米百俵」で有名な明治の教育者小林虎三郎（病翁^{へいおう}）の書や遺品、第二次大戦関係資料（出征・防空・空襲資料）などがよく揃っています。

収蔵資料点数：4636点

越後国信濃川上杉大合戦之図（戊辰戦争の錦絵）



考古の部



室谷下層式土器(縄文草創期)

展示

人類の歩み——歴史・文化を実証するものに土器や石器などがあります。考古展示室は次ページの編年によれば、先土器時代から歴史時代に至るまでの基礎資料の展示コーナーを主として、縄文時代の文化内容を示す遺構・遺物のコーナー、それに集落全体を調査した岩野原のコーナーに大きく分けられます。

編年表のコーナーでは基礎資料の石器や土器を各遺跡・時代を追って展示しています。

旧石器時代は大陸と地続きの氷河期で、ナウマン象などの大形獣を追ってきました。地学コーナーのナウマン象白歯化石はその一例です。この時代は土器が発明されておらず、石器ばかりの文化です。檜の木平・御渕上・月岡・中土などは代表的な遺跡です。御渕上にはナイフ・石刃・尖頭器・握斧・彫刻器などがあります。月岡・中土は旧石器時代も終りごろの遺跡で、細石刃が出現します。中土には、細石刃・細石刃核・石刃・彫刻器などの石器があります。

氷河期から温暖な気候に移る縄文草創期には土器や石器の使用がはじまります。小瀬が沢には日本最古の窯文土器があります。石器には石器・石槍・有舌尖頭器・搔器などと、シベリアと同じ丸のみ・植刃・断面三角形の錐があります。室谷は土器発明のヒントを与える形態の土器が5点も復元展示しています。室谷の土器は口縁や底部が方形を呈し、竹カゴ・皮袋からの土器発生説の貴重な資料です。室谷は草創期から歴史



火焔型土器(左、千石原 右、馬高出土)

時代までの遺物が層位的に出土したところで、土器片を層位順に並べ、室谷下層式土器が最古の一群であることを示しています。そのほか、山岳狩猟を示すおびただしい獸骨が骨角器とともに展示しています。

次の早・前期の県内は多雪地帯で、遺跡が少ないです。当館では卯の木の押型文、下別当の表裏縄文、室谷上層の羽状縄文、泉竜寺の爪形文土器や各地出土の玦状耳飾りなどがある程度です。

しかし、中期になると雪を技術的・精神的に克服したのでしょうか、遺跡が急増し、規模が拡大し、土器文様が立体化し、縄文文化の華がひらきました。縄文土器の王者——火焔土器はこのころのもので、千石原・山下・馬高の土器群は火焔型土器の発生から完成までをたどれます。火焔型土器の完成品は中央のケースに展示してあります。

三十稻場・根立・三仏生は後期の遺跡で、土器文様が落ちつき、土器の器種セットが豊富となり、注口や蓋などがあります。三十稻場には玉作りの筋砥石や玉が橋状把手の刺突文土器とともに展示してあります。

晩期の土器はさらに、技術的に高められ、藤橋の香炉・浅鉢・壺のように精巧なものがつくられました。町裏の漆塗りの壺や朝日の方形土器はその代表的なものです。また、赤松の玉籠による石器製作の過程を示す展示品も晩期のものです。

弥生時代は稲作が開始され、鉄器を使用する革新的な文化です。横山は集落のまわりに溝が巡っている「環濠集落跡」です。横山の土器には甕・壺・器台（壺などをのせる）・高杯などがあり、中には朱が塗られたものもあります。米の糀痕がついた土器や稻の穂を刈

り取った石包丁など稻作に関する遺物もあります。
 おおかやば こふん よこあなしときしんれきしつ
 大萱場古墳は横穴式木芯礎室という特殊な墓室を持
 つ古墳で、大甕や平瓶、鉄刀などがあります。

奈良時代の土器に土師器と須恵器の2種類があり、
 かんのかまあと 間野窯跡は須恵器を生産したところです。登り窯の模
 型や窯壁と、杯・蓋・壺などを展示しています。

縄文文化の遺構・遺物のコーナーには、中・後期の
 石囲炉、各地出土の石鏃・石匙・板状石器・石錐・石
 斧・石錘等の石器、土偶・三角埴土製品・石棒・石劍
 などの呪術的な遺物、耳飾りや玉のアクセサリー、木
 の葉や網代のついた土器底部、多孔底土器などを展示
 し、縄文人の日常あるいは精神生活にふれられます。

岩野原のコーナーには162基の住居跡などとともに発
 見された遺物の一部を展示し、縄文中・後期の生活実
 感が伝わるように努めています。展示品には石鏃・板
 状石器・石錐・石斧・石錘・浮子・石皿・石棒・土偶・
 土笛・耳飾り・ヒスイの大珠・火焰土器の仲間の土器・
 筒形有孔土器などがあります。また、縄文人の主食と思
 われるクッキーの炭化物が小型石皿につまつたまま
 のものは珍しいものです。

考古展示室は実物展示品のほかに、旧石器時代では
 石器のつくり方・使い方、岩野原では住居跡・家のた
 て方・縄文の生活カレンダーなど、主な遺跡には調査
 風景や遺物の出土状況のパネルを展示し、より先史時
 代の文化内容の理解を深めたり、調査とはどういうも
 のであるかを伝えています。

資料

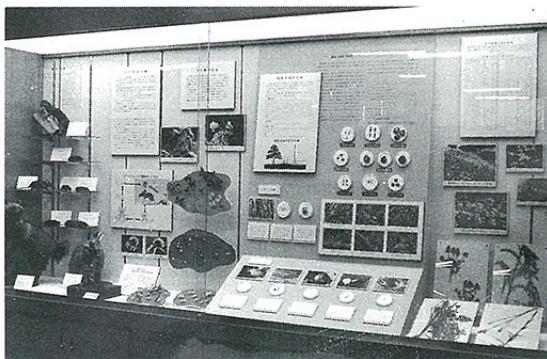
当館の考古資料は、市内関原町の近藤考古館が火焰
 土器の馬高をはじめ、各地を調査・収集してきた資料
 の一括寄贈品を基礎に、当館が開館以来県内各地を調
 査してきたものです。その数は250遺跡、完形資料3027
 点、破片類1500箱以上におよぶ膨大なものです。この
 中には上記の御渕上・小瀬が沢・室谷・馬高・岩野原・
 藤橋など、新潟県あるいは日本の先史時代を研究する
 上で欠くことのできない資料が豊富にあります。また、
したやしき ほくしょ
 展示されていませんが、下屋敷の墨書き土器は各方面の
 注目を集めています。

越後原始・先史時代編年表

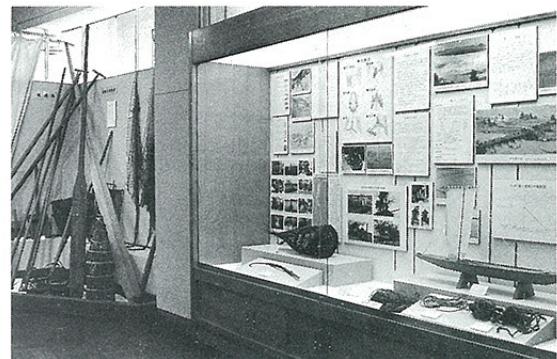
時代	古年代	遺跡地	所在地
歴史時代	約1,300年前	下屋敷	長岡市
奈良時代		間野窯跡	長岡市
古墳時代		大萱場古墳	長岡市
弥生時代	約1,700年前	横山	長岡市
		下谷地	柏崎市
		尾立	長岡市
繩文時代	約2,100年前	藤橋	長岡市
		朝日	三島郡越路町
		石倉	柄尾市
後期	約3,000年前	塔ヶ峰	見附市
		三仏生	小千谷市
		三十稻場	長岡市
中期	約4,000年前	馬高(火焰土器)	長岡市
		山下	"
		千石原	三島郡三島町
前期	約5,000年前	鍋屋町	中頸城郡柿崎町
		泉竜寺	中魚沼郡中里村
		室谷洞窟3層上	東蒲原郡上川村
早期	約6,000年前	下別当	中魚沼郡津南町
		三峰	"
		卯の木	"
草創期	約9,000年前	室谷洞窟下層	東蒲原郡上川村
		本の木	中魚沼郡津南町
		小瀬が沢洞窟	東薄原郡上川村
旧石器時代	約12,000年前	荒屋	北魚沼郡川口町
		月岡	北魚沼郡堀之内町
		中土	南蒲原郡下田村
		御淵上	"
		楳ノ木平	中魚沼郡津南町
		貝坂	"

古年代はC₁₄を基礎として各時期ごとに割当てたものです。

信濃川の自然と生活展



高水敷の自然



人とのかかわり

地域と密接な関係にある“母なる川”信濃川の自然の生態と、これをめぐる人びとの生活のかかわりを展示しています。

水中の魚貝類と水辺の自然

信濃川は、平野部に入って川幅が広くなり、水温が上昇します。それにともない、藻類の生産が高まり、水生昆虫や魚貝の種類が豊かになります。水辺は時おり水をかぶるので、生物界は比較的単調です。

ここでは、魚貝の種類と棲み分け、山間部から流れてきた岩石類、水辺に繁殖するコアジサシなどを紹介しています。

河原の自然

河原は、増水の影響が比較的少ない地域です。石の混る砂質土壌が主体で多年生植物がよく繁茂します。また、ところどころ水たまりや湿地があるので、ここを生活の場とする動植物は豊富です。

展示は、各種の水生昆虫、両生爬虫類、イネ科植物、ヤナギ類、サギの繁殖などを取り上げています。

高水敷の自然

高水敷（河川敷）は、平常時は増水による被害をほとんど受けない地域です。土壌は砂や粘土混りで、水田・畑・果樹園などに適し、またグランドなどに利用されています。しかし、ニセアカシアやオニグルミなどの自然高木林がところどころ茂っているので、動植

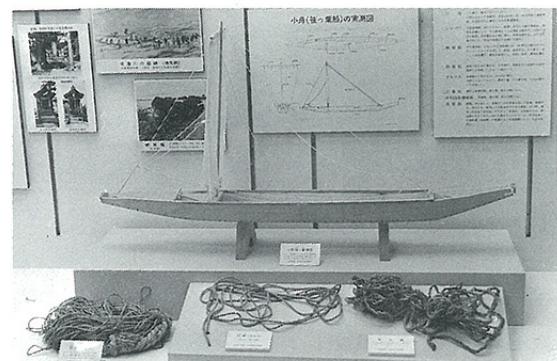
物は豊富です。

展示は、各種の帰化植物、陸産貝類、昆虫類、哺乳動物、有毒のツツガムシなどを取り上げています。

人とのかかわり

川は、人びとに魚貝類などの幸を与えました。そして、人びとは川が運んだ肥沃な土壌を耕して農業を営んできました。また川は、往来運送の重要な径路であり、文化の伝播、育成に大きく貢献してきました。一面“あばれ川”的異名をとり、時おり襲う洪水が人びとに大きな損害を与えるました。

展示は、河川交通、渡しと橋、漁業、砂利採取業、水害、水制工事、ツツガムシの祭祀などを取り上げています。



信濃川の小舟模型と舟の引綱・紛れ縄

普及活動

- 少年少女青ざら科学教室 小学5・6年生を対象に5月から、地学、植物、昆虫、野鳥、縄文教室の5教室を設けて野外実習を行い、11月の科学フェスティバルで成果を発表します。
- 地層と化石の観察会 小学5年生～一般を対象にして野外で地層や化石を観察します。年に3回程度実施しています。
- 植物をしらべる会 市民を対象にして季節に応じた植物を観察します。
5月—春の植物と山菜 6月—初夏の植物 7月—親子で夏の植物 10月—キノコを調べる会 11月—冬芽の植物 3月—雪の下に芽吹く植物
- 昆虫観察会 小学生以上を対象に4月から10月の間、季節に応じた昆虫を観察します。



- 野鳥相をしらべる会 4月から11月まで同じ場所を観察地にしてそこで見られる野鳥の種類や生態を観察します。



- 探鳥会 年4回、季節・場所によってよく見られる野鳥を観察します。
- 考古学教室 小学校5年生以上を対象に縄文時代の生活の一端を体験してもらいます。
縄文土器をつくる会（5～6月） 縄文時代の石器をつくる会（7月）
- 博物会講演会 学芸員の調査研究発表と合わせて、館外に講師を依頼し、11月に講演会を開催しています。
- 生物標本・自然科学写真展示会と生物研究発表会 県内の小・中・高校生を対象に、児童生徒が動植物の観察や研究、生物標本・自然科学写真の作成・生物研究発表を通して科学知識を深め、自然保護思想が普及することを願って10月に実施しています。

文献発行

- 館報（NKH） 生物研究発表特集号
- 館報（NKH） 研究室特集号
- 博物館研究報告
- 博物館資料シリーズ

開館時間 午前9時から午後5時まで
(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日及び12月28日から翌年1月4日まで。（ただし、月曜日が祝日等の場合は翌日）

入館料無料

博物館案内図





〒940 長岡市柳原町2番地1（長岡市役所柳原分庁舎）
TEL 長岡(0258)35-0184